

友だちと心を通わせながら 生き生きと学習する児童の育成

～特別支援教育の視点を生かし 思考の交流のある協同学習の実践を通して～

総社中央教育研究会 代表者：横山昌弘

●実践活動のねらいと期待する成果

(1) ねらい

平成22年度からの協同学習の取組や平成26年度からの「思考の交流」に視点を当てた取組を通して、児童の自己肯定感や自己有用感の高まりが見られ、自分の考えを生き生きと語ることでできる児童が増えてきた。しかし、「児童の意識の流れに沿った協同学習にするにはどのように課題を設定すべきか」「だれもが協同で学ぶことの良さを実感するためにはどのように課題を設定すべきか」等、「焦点化された課題設定」の必要性が明らかになった。本校では、この焦点化への取組は特別支援教育の視点で授業を見直すことにつながると考えた。つまり、「焦点化」等の特別支援教育の視点を取り入れながら課題設定を工夫し効果的に協同学習を展開することで、思考の交流を促進することができると考えた。

(2) 期待した成果

- ①「思考の交流のある協同学習」への取組は児童にとって見通しを持ちやすく分かりやすい授業につながる。このような授業を続けることが学力の向上につながると期待する。
- ②中学校区で連携して研究に取り組んだり、積極的に成果を発信したりすることで、「思考の交流のある協同学習」という学びを柱とした小中一貫教育が進むと期待する。
- ③積極的に研究と修養に取り組み、意欲と責任をもった教育活動を展開することのできる教職員の育成につながる。

●実践活動の内容と方法

(1) 思考の交流のある協同学習にするための取組

授業は、何を学び、どんな力をつけるのかを子ども自身がはっきりと持つことが必要であり、子ども自身が自らつかんだと思わせることが大事である。そこで、ねらいの焦点化と活動の焦点化に重点をおいて取り組む。

①ねらいの焦点化や活動の焦点化に視点を当てた実践

ア 1年生の算数科「かたちづくり」の導入（ねらいの焦点化）

教師は突然1枚の布で図形を隠したり見せたりする。

「長い四角はどうなったのか」と発問すると、児童は身体が前に乗り出すほど、目を輝かせて図形の変化を見つめようとする。「分かった」と知的好奇心は高まり、「どこをどう動かせば形が変わるのであろうか」というねらいを主体的につかんでいった。

イ 2年生の国語科「スイミー」での読み（活動の焦点化）

スイミーが出会った生き物の挿絵を複数提示し、「スイミーが元気になったのはどれか」と発問するとき、あえて間違っている挿絵を入れておく。児童は、正しい選択理由を考える際に、文章中の比喩表現に着目し、スイミーの心情の変化を比喩表現を通して読んでいこうとした。



1年生算数「かたちづくり」



2年生国語「スイミー」

②読みの系統

学び方を知らないものに思考が生まれるわけではない。国語科でもそれぞれの単元で学ぶ読み方がある。表は、児童に示した4年生「プラタナスの木」の学習での読み方が他の学年の読み方とどうつながっているのかを示したものである。児童は何を物差しに学習すればよいかという見通しをもち主体的な学習につながっていった。

4年生につながる読みの系統									
3年まで		4年						5年	
□ 読み名		□ 伏線（ふせん） □ 線（せん）						メッセージを読む	
□ 出来事 □ はじめのしりとり □ 起承転結（あ・か・そ・け） □ 場面の対比 □ ファンタジー □ 時代背景 □ 民話		□ 視点 □ 視点の転換（せん）						山場・結末の意味	
□ 登場人物 □ 中心人物 □ 人物像		□ 視点 □ 視点の転換（せん）						山場・結末の意味	
□ 語り手（ナレーター） □ 地の文		□ 視点 □ 視点の転換（せん）						山場・結末の意味	
□ 会話文 □ 心内語 □ 行動描写（どうぶつ） □ 言葉描写（ことば） □ 場面の描写（ばけん）									